

るが、その三巻とは別に付属という部分がある。この部分は本体とやや趣が異なり、慈円の伝法の師でもある伯州大山の基好から、慈円とは別系統に榮西へ、榮西から阿忍、阿忍から円爾に伝授され、円爾の口伝を弟子の道照が伝え記したとされるものである。従って付属という「師」は、それを記した道照から見れば円爾を指すが、伝法者である円爾からみれば阿忍の言とも考えられる。いずれにせよ基好から榮西の系統の言説に付加されたものと推定できる。

まずAの文でいう大悲胎藏八字行法とは『瑜祇經』金剛吉祥大成就品に出る真言で、台密ではとくに安然以来、胎金兩部にわたる真言法として尊重されたものである。八字とは胎藏五仏の種子アビラウンケンに金剛界五仏の種子バンウンタラキリアクのうち、ウンキリアクの三字を加えた合成真言で、それに安然の『胎藏界対受記』にいうタラを加えて九字真言とする口伝を指す。ここではその八字真言の前半の胎藏界大日五字明が金剛界大日の法界体性智であり、後半三字にタラ字を加えたのが金剛界四仏の四智であるとしている。そして「一智法身八字成身」とは五智冥合一体のことともあるから、それは金剛界五仏の総体であり、八字行法とはこの大日の仏位を成ずることに読める。

次にBの文では、五八の真言は金剛界五部は如来の内証で胎藏界三部が外界への作用であり、一法身から兩部として出

現するが、それらは一智を内証とするというのである。五八とは、五部・三部つまり胎金が冥合した真言であり、一智法身の開顯ともなるとある。またさらに「冥合」とはこの一智法身という本地を觀點とした場合であり、「合行」とは衆生の向上門である從因至果の立場からのものとして区別している。確かに台密では、単に兩部を併修する合行と兩部を教相と事相において整合させる視点を区別するから、ここでの謂いは台密の兩部合糅の觀點に近いもので、それならば一智法身とは兩部各々の大日を凌駕して完全に統合する性格を帯びたものといえよう。

一智法身に関して、さらに『瑜祇經』に対する円爾の講説を弟子の癡兀大慧が筆録したとされる『瑜祇經見聞』を見てみると、まず冒頭の方で、

經云、薄伽梵金剛界、遍照如來文。

師云、此是五部惣体、一智身也。故次下云、以五智所成、四種法身於本有金剛界乃至光明心殿中一也。當知、中西南東北、五仏は所現所生之仏、則別体也。遍照如來ハ方外ノ仏也。方外ノ佛者、五方外通体一智身也。文相分明云云。然次第相生者。從二方外ノ遍照如來一生三、五方ノ五仏。故云於本有金剛界乃至光明心殿中一也。

とあり、經の金剛界「遍照如來」を五部惣体の一智身とするが、この仏は五仏を別体とする「方外」の存在で五仏を生み出し五方の外にある通体というのだから、単なる金剛界大日如來を凌駕して兩界に超越する、いわば根源的な仏とみなせ

よう。

しかしその後の問答では「方外本地一智身如来とは何か」という設問に「經初ノ金剛界遍照如来者則是也」と答えており、その像容についても「バンを種子とし月輪を三昧耶形とする」ともあるから、金剛界大日を指すことになる。ところがこれらに続いて、

師云、於此經一卷十二品中、序品ト愛染王品ト仏眼品トハ、各明三十七尊成道也。然序品以「智字ノ大日」為「通体一智遍照如来」。從「此一智身」出「現三十七尊」還入「此一智ノ本地身」也。愛染王品ハ以「智字大日」為「通体一智大日」。從「此一智身」出「現三十七尊」還入「此智字ノ一智本地身」。仏眼品ハ、從「仏眼一智身」出「現三十七尊」還入「此仏眼一智本地身」也。故此等ノ三品ハ同付「建立」、於「智」等一智字相本地身成仏外迹、以「三十七尊」為「極本」也。

とあるから、円爾の考える一智身とは、単に超越的な大日のみならず、あらゆる局面を包摂し、すべてに通用する仏と取ることでもある。いわば冥合の仏に相当しよう。それは一智身が八字成身と五字成器を用いることについて

答。八字成身者、行者於「自身通体上」作「布字觀」。是但開顯本有功德ノ在処也。全非「始テ置テ其字輪」此成身之外以「五點阿字」為「成器上者」、更非「他身」。以「一智ノ本体」為「器」。以「兩部八字成身」一智身一為「身」也。故尋「兩部八字成身一智身」、即是本有五點ノ阿字也ト得也。故云「冥合一智身」也。全非以「二法」為「成身」也。所以「成器ノ五阿」是「自身」也。成身ノ八字即自身也云云。

故八字成身シ已ヌレハ即成「五點阿字具足ノ体」也。故能所冥合境智相応身也云云。故此一智身灌頂ハ全無「投花灑水ノ儀」也。所謂依正未分、凡聖不二、法界独一身故也云云。

と、八字成身とは行者が自身の通体に布字觀を行い、単に胎金兩部を併修する合行の行体を器とするのではなく、その成身を本有の阿字の五點の器とするのであって、それ自体が行者の自身であり、凡聖不二、依正未分の能所冥合の身体であるとする。そしてそれこそが法界独一身ともいうから、円爾のいう一智身とは単に仏として超越的な法界独一身ではなく、行者そのものが八字真言と五點阿字の成身一智身であるというのであろう。これは、あるいは禪門でいう見性成仏のような視点も基底にあるかとも思われ、また行者といっても「凡聖不二」の謂いからは凡夫すら視野に入ろうか。

三 『大日經見聞』の一智法身

このような仏身に関しては、やはり円爾の講説を弟子の癡兀大慧が筆録したという『大日經見聞』でも言及しているが、同書に出る「師」もまた、円爾のことかその師の榮朝の説か（？）
不分明なところがあるが、その冒頭では、

師云、於此毘盧有「二」。所謂「一ハ一智毘盧」、此是本地能加持身。「二ハ五智毘盧」、此是中台尊所加持身也。一智身者兩界未分之導、通体総相毘盧也。全無「境智能所殊」非「迷法」故、但号曰「智」

也。未分一体尊故、名云^レ一也。……答、冥合一智ノ尊ハ八字成身
五字成器也。此義最深秘也。五智中台尊成身者、内証成道ハ一字
五点也。……群機成道ハ五智五輪也。……師云、於此加持^二有^二二
義^一。一者以^二一智^一為^二能加持^一、以^二八葉中台^一為^二所加持^一。又以^二内
証所加持身^一為^二能加持^一、以^二群機伝説身^一為^二所加持^一。又以^二此身^一
為^二能加持^一、以^二群機具惑身^一為^二所加持^一也。⁸⁾

と、一智毘盧遮那を通体総相とし、中台のを五智毘盧遮那と
して本所能加持身と所加持身として区別している。ただしこ
れも厳密に言えば、胎藏中台大日を五智というのは金剛界五
智を当てはめているわけで、この区分が適正かどうか問題を
含む点もある。しかし円爾は両部の冥合を主張するのであ
るから、もはや区別はないのかもしれない。

では行者と仏の関係はどうかといえ、三密行法について、
自浄^三三業^一即為^三本尊三密之所^二加持^一、本尊行者三密相応故從^三此
一門^一得^レ入^二法界門^一也。……而^レ此宗ノ尊ト者、皆此内証本地久
成仏陀也。全非^二始覺修生尊^一故、内証本地行者ハ又更不^レ修^二対治
行^一也。所以行者ノ成道亦復如是。

というから、この考え方自体は密教の瑜伽三密行の趣旨に添
うもので、密教行者が対症的な行を行わないというのも、こ
こで述べる法相、華嚴、法華の行者に比較相対であるなら密
教の優位性をいう言説として理解できよう。それは続く「然
今此密宗ノ独於^二此本地久成内証之境界^一直開^二三密修觀方便^一
正撰^二行者^一。行者若能令^下三業^一同^中於本尊^上、從^二此一門^一得

円爾弁円の仏身觀(水上)

入^二法界^一」の言い方とも符号する。しかしその行者が「内
証本地の行者」というのはどうであろうか。

このことを、行者そのものを一智成身とする言説や、先の
文で「一智を以て能加持とし中台五仏を所加持身」とする説
と併せて考えると、やはりこれらは凡夫成仏とまではいわな
いまでも、そのような凡位成仏の傾向が看取できるとはいえ
まいか。

次に五大の五字を解釈するなかで、私に云わくとして、ア
は不、ラカは生で仏心種子と述べて「両部大日入^二三昧
地^一能生^二仏心種子^一也。是也。於此一字有^二五位^一。初名
為^二普賢大菩提心^一也。事相大事也」と、両部の大日が阿闍
と阿弥陀の三昧に入ってタラを種子とする仏心種子を生ずる
といい、また「一切智性は如来の種子」という文について「此
是識大也。以^二上五大^一為^二別体^一、以^二此識大^一為^二総体^一。在^二如
来一名五智^一、在^二衆生一名五藏神^一也。所謂魂魄意志神是也」¹¹⁾
と、如来種子は識大で五大の総体といい、さらに五大は如来
においては五智、衆生では五藏に当たるとする。この場合五
大が五智というのは普通だが、衆生の五藏に配当するのに普
通いわれる肝肺心腎脾などの臓器ではなく、魂魄意志神とい
う心のあり方や心作用のような、人の意識的なものに配当す
る例はまれではなからうか。これは成身や成仏という行為
を、すべて人の心を視点として考えたからであろう。

円爾弁円の仏身觀（水 上）

八四

さらに卷三（具緣品二上）では『金剛頂經』のバン・ウン・タラ・キリ・アク、『大日經』のア・サ・バ、『相應經』のア・バ・ウンの種字について秘秘中深秘の釈があるとして図が載るが、それでは『相應心經』（『瑜祇經』を指すとされる）では向かつて右に台大日^マア^マ理と、左に金大日^マバン^マ智、中央が不二大日^マウン^マ事とあり、『大日經』は右に台大日^マア^マ觀音、左に金大日^マバ^マ薩埵、中央に不二大日^マアとあり、『金剛頂經』では右に金大日^マ不變位^マバン^マ中^マ果と金隨緣薩埵位^マア^マク（ウンの誤記？）^マ東^マ因^マ、左に台大日^マ不變位^マア^マク^マ北^マ果と台隨緣觀音位^マキ^マリ^マ南^マ（西の誤記？）^マ因^マ、中央に歸寂不二大日^マ仏身位^マタ^マラ^マ南^マ因果不二とある。⁽¹²⁾これは先述のウンキリ三昧からタラの仏心種子が生ずるのと同じ論法であろう。

四 まとめ

このように見てくると、円爾の密教における仏身觀は、両部の大日如来を超越する一智法身を主張するが、それは単に五仏を統合包摂する超越的な一仏であるだけでなく、本来的に本有のものとして行者または衆生とも対応することになる。それは、一智身を能加持、中台五仏を所加持、その内証眷属を能加持、伝法された衆生を所加持に、それがさらに具惑の衆生に敷衍する構造を持つからである。円爾において密

教修行は、人に本来内在する真俗不二の本地の一智身を得るわけで、この修行とは始覺発心の修行ではなく、仏と行者において本覺本有の立場を視点とする構造を有しているといえるよう。

- 1 拙稿「円爾弁円の瑜祇經解釈——一智法身を中心に——」（多田孝正博士古稀記念論集『仏教と文化』山喜房仏書林、二〇〇八年）。
- 2 『胎密契愚鈔』付属（拙著『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八年、六五六）。
- 3 台密のこのような両部融合の概念を三崎良周は「胎金合糅」と表記した。しかし実際の文献上などでも、両部の合行と合糅（冥合）の区別は難しいものがある。
- 4 『続天台宗全書』密教2—二〇五上。
- 5 『続天台宗全書』密教2—二〇七上。
- 6 『続天台宗全書』密教2—二〇九上。
- 7 鈴木学術財団版『日本大藏經』の解題で、高木神元は本書の「師云」は栄朝の言か円爾のか、「私云」も円爾のか大慧のか決定できないとする。
- 8 鈴木学術財団版『日本大藏經』（以下『日藏』）二六—三二六上。
- 9 『日藏』二六—三二七下。
- 10 『日藏』二六—三二八上。
- 11 『日藏』二六—三三二下。
- 12 『日藏』二七—一一下—一二上。この三經については『大日經見聞』には、その構造を図示しているが、誌上で図版にしに

くかったので文で示した。

〈キーワード〉 円爾弁円、禪密僧、日本密教、鎌倉仏教、本覚思想
(公益財団法人中村元東方研究所専任研究員・博士(仏教学))

新刊紹介
相馬 一意 著

曇鸞『往生論註』の講究

A五判・五二〇頁・本体価格二一、〇〇〇円
永田文昌堂・二〇一三年七月

円爾弁円の仏身観(水上)

八五